

ここは富水 すどう美術館の新しい活動の場
 こんこんと水が湧くようにアートも汲めども尽きない希望が湧いてくる
 水はわたしたちになくってはならないもの 「AQUA」が誕生する

2014年8月発行38号 すどう美術館
 〒250-0853 神奈川県小田原市堀之内373
 TEL.0465-36-0740 FAX.0465-36-0739
 info@sudoh-art.com
 http://www.sudoh-art.com

生き抜くための『術』

大木みどり

精神のバランスを崩し病んでしまう人、生きるのを断念せざるをえない人、私はそのような人達を10代のころから間近に見てきたのですが、今の私の見解では、彼らをとりまく社会の価値観が違うのであれば、このような事態は決して起こらなかったと信じています。

社会でまかり通る一般常識、価値観は一部の人間の想念と都合によって作り出されたもの、と私はずっと以前から捉えているのですが、それでも、それらをもとに人を評価し決めつける「世間」というものは私にとって恐ろしい存在でした。枠から外れたものに「異常」「病気」「不適應」などのレッテルを貼って差別し排除する存在、それは私たちの社会生活の中に深く食い込んでいます。

18年前、私は生まれてはじめて日本を出て異国で暮らし始めます。周囲の反対を無視し、当面必要なお金だけ稼ぎ、不安はありましたがともかく出発してしまいました。オーストラリアの先住民アボリジニーのアートに興味があることを渡豪理由に挙げてはいましたが、当時置かれていた環境からの脱出が一番の目的でした。周囲からの圧力に苦しみ、押しつぶされそうになっていた私を生き延びさせようとする大きな力が私を突き動かした、と言ったほうがいいかもしれません。これしか自分が生き延びるすべはなかったのだと今でも思います。

7年間に及んだ豪州留学から帰国して会社勤めを10年間続けた後、新たな道に進む準備をしている今の私にとっても「世間」や社会の一般常識というのはまだまだ恐ろしい存在ですが、以前のような絶対的な恐怖は感じなくなりました。異なる社会で暮らし、異なる文化について学び、異なる価値観に日常的に触れながらアート作品の制作に自由に取り組んだ体験が、私の内部に潜んでいた生き延びる力を引き出し、伸ばしてくれたのだと思います。自分にとって価値あるもの、大切なものを表現することが、降りかかる困難に打ち勝って生きる力と気概を与えてくれたのでした。

今回4カ国を回って作品をつくるという体験をしてきたのですが、私は、そこで出会った人や動物植物が、その土地々々の厳しい環境と折り合って生き抜いている姿に強く心を打たれます。バイタリティーを奮い起こし、生き抜くために試行錯誤を重ねる中で生まれてくる「術」のようなもの。—その多様性に触れる中で、私はこれこそがアートの原型ではないかと、あらためて感じています。



仙仁司

点描

こんな話でよかったです (25)

わが家の庭は小鳥達にとって程よい飼場になっている。スズメ、メジロ、ヒヨドリ、シジュウカラ、ジョウビタキなどなど、それぞれ時間帯にやってくる。さほどの広さではないが東西に長い形になっていて、南と西で隣地に接し、陽当たりは程々。道路際のフェンスには7mの長さで人目の高さに咲く藤は4月になると、咲くよ咲くよと気をもたせ20日前後に満開の紫を見せる。東端には長男が実生から育てた白樺がすっかり10mの高さになって小鳥の休息所となり、風にそよぐ枝垂れの葉は夏の暑さを感じさせない涼感でいっぱい。その傍のまだ小さいライラックは春の妖精を連れてくる。沢山の小花は無数の香袋、道行く人への贈物。その近く、小さい池は小鳥の水場、沢枯梗と蝦蟇の穂。大きな瓶には小さな睡蓮。

台所の窓越しに位置するスモークツリー、本来ならばホワツとした文字通り煙のように見える花を沢山つける筈なのに、何故か花芽が少なくがっかりするところなのであるが、木の葉そのものが実に瑞々しい爽快感を持っていて薄く透き通るような葉は何とも言えない芸術そのものなのだ。身の丈を越えリビングの窓いっぱいの石楠花は蕾から咲き終えるまで延々続く無上の名画。この隣りの柿の木、桃栗3年柿8年の掟を破ってまだ実を知らぬ身、西端には仄かなピンクの花水木。

手を入れすぎない長男と妻の仕様が功を奏して縦横無尽の楽しさよ、蝶、鳥よ共に遊ばん。

そうだヒヨドリが5月24日頃からスモークツリーに営巣、6月30日に4羽が巣立っていきました。これが本当に大変だった。詳しくは次回に続きます。

すどう美術館のこれからの活動

すどう美術館館長 須藤一郎

8月19日から31日まで第17回目となる「若き画家たちからのメッセージ」展が始まります。今回は12名の若き作家を選ぶことができました。それぞれが熱い思いを抱いていて、期待が大きすぎて、初めて面接の後に制作していただき、初めましての作品が展示されるので、とても楽しみです。先日、神奈川県新聞社の県西総局長が来館され、ユニークな公募展と評価し、長時間取材してくださいました。展覧会が始まる前に記事をお書きくださったことです。

「東日本げんきアートプロジェクト(ギヤツペ)」の活動ですが、3回目となる本年は少し時期をずらし、10月に今年も岩手県大槌町で行う予定です。先ほどギヤツペ代表の4名が改めて、現地に行きたくてくださいました。その結果でメンバーの人たちと検討を行い、2か所または3か所の施設で展覧会、コンサート、ワークショップを行うこととして、詳細を詰めています。チャリティ展、この基金については、チャリティ展、チャリティコンサートなどにご協力をいただくアーティストの皆さんのほか、いろいろな形で協賛くださる方々の支援をぜひと思っています。引き続きご協力をお願いいたします。

11月には小田原市の無尽蔵プロジェクトの一つである「ものづくりデザインアート」の活動として、今回また、当美術館において小田原で活動するアーティストの紹介する現代アート作家とすどう美術館が紹介する現代アート作家とのコラボレーション展を開催される予定です。刺激的な展示が行われるものと期待が膨らみます。皆さまのご来館をお待ちしています。

白いノート 16

作家と出会って以前私の先輩が「本当に作家と言えるのは、副業をもちに作品だけで生計を立てている人だ」と話していた。そんなこと言ったら、日本には作家と呼べる人がほとんどいなくなってしまおう、と思つた。

経済面では厳しい状況をかかえながらも、収入を得ること、制作できる時間と場所を確保することの両立を、工夫しながら制作している作家がほとんどだと思う。たやすしいことではないと思うが、それでも続けているのは、それだけ美術の世界には惹きつけられてやまない奥深いものがあるからだろう。

では何をもちて作家というのか。それは確固たる意志を持って作品を作っているかどうかにかに尽きることではないだろうか。どんな時も常に作品のことを考え、進化しながら新しい作品を生み出している、そんな作家たちはこの仕事を通してたくさん出会わせてもらった。貴重な出会いは作家だけではない。共にある作品に、ハツとさせられたり、深く考えさせられたり、心に響くものを見せてもらった時、理屈ではなく作家としての力量を感じさせられるのである。高橋玉恵



そんなこんなで

立川志ら

この間、館長と昼間っからワインを飲みました。ほろ酔いで帰りしな、館長と2人っきりで飲んだのって、15年近い付き合いで初めてだと気付いた。
そもそも、若手落語家を何とかしようと思案を探して下さった方に、銀座時代のすどう美術館に連れて行かれて、「あ、どうも。須藤です」からお付き合いが始まった。
その場で、立川談志の一門ではあるが、厳密には師匠が異なる4人で、年4回の「四人の真剣勝負」なる落語会の開催が決定。毎回の終演後の打ち上げでは、館長は4人の中心に座ってるが、話の中心にはならず、ニコニコして飲んでた。
ある時、落語会の後片付けが、石川県在住の作家さんの搬入と重なり、館長が紹介したために手伝う羽目になったが、その縁で石川県の落語会の開催が決定。今では石川県を年間でも多く訪れるほど広がりを見せてるが、初めての時は、気付いたら館長も同行してて、ただ落語聴いて笑って、毎晩一緒に飲んでた。
館長の本の出版記念パーティーでは、そこそこ館長に悪態ついたスピーチなんかした後、二次会では隣に座って飲んでた気がする。
銀座から富水に移転した際には、柿落としみたいな流れで落語会をやることになり、終わったらそのまま飲み会になって、「変わった造りの家ですね」とグラス片手にウロウロ飲み続け、決して近所さんじゃないのに、私はどうやって帰宅したかは記憶がない。
そんなこんなで、今回すどう美術館を訪れたのは、連日の副館長のお見舞いで、館長が弱りかけてるだろうと思ったから。
少し緊張感持って、「こんにちわ〜」とスリッパ履かずに上がったたら、館長はトイレに入っており姿は見えず、「は〜い」と迎えられ、心配するのはやめた。
形だけのお茶を飲み干したところで、「飲みますか?」とワインボトルとグラスを持ってきた館長に、「そのつもりです」と答えた私。ちょうど赤ワイン1本飲み干してお開きになったけど、おつまみは館長が納豆おかきを1つ食べただけ。
館長、今度は副館長に美味しい料理作ってもらって飲みましょうね。
では、また。

続々 世界一小さい美術館ものがたり

「生きて行くには背伸びせず、身の丈に合わせた生活をするのがよい」という言葉に、確かにそのとおりで、自分も挑戦して生きていくには、身の丈に合わせた生活をするのがよい... (vertical text columns)

第17回若き画家たちからのメッセージ展
8月19日(火)~31日(日)月曜休館

石田勝也展
9月2日(火)~14日(日)月曜休館
絵や個展について何か書くことやタイトルをつけるのは非常に難しいです。
言葉の力はとも強くてイメージがかなり引っ張られてしまうからです。それは見る人ばかりではなく作っている僕自身もしかりです。
今は制作の最中なのでなるべく具体的なことを書くのはやめようと思っています。見る人や自分自身に混乱を生じさせてしまわないように。

第16回若き画家たちからのメッセージ受賞展
米澤寛子展 ぼくらのなかみ
9月16日(火)~28日(日)月曜休館
展示会のタイトル“ぼくらのなかみ”の“なかみ”とは、心臓とか血液とか骨という意味ではありません。
食べることで、寝ること、生きてきた経験、家族や友人、人格を形成しているもの。
ぼんやりとですが、そういうことを表しています。
もちろん心臓も骨も、食べることで寝ることによって保たれているのですから、結局同じことなのかも知れませんが、あなたと、わたし“ぼくら”のなかみは何なのか、ぼんやりと、そういう感じの、展示会です。

展覧会 info

東日本げんきアートプロジェクト協賛のお願い

(活動ブログ http://ameblo.jp/genki-art/)
東日本げんきアートプロジェクトは今年も活動を続けています。ご協賛いただけます場合には、下記の銀行口座にお気持の金額をお振込みいただければ幸いです。
振込先 みずほ銀行 小田原支店
口座番号 普通 2935448
口座名 東日本げんきアートプロジェクト
(代表 須藤一郎)

編集後記

野窓

まだ寒かった3月。ひどい頭痛のあと意識を失い何もわからなくなりました。
血の手術があり、心筋梗塞の措置がとられ、水頭症の手術も行われ、たこのことですが、はつきり意識が戻り、いろいろな理解できるようになったのは6月10日、水頭症の手術が終わってからです。
館長よりその間たくさんのお見舞いや心配をいただき、お話を聞き、ただ感謝を申しあげるとばかりです。本当に心配をおかけしました。これからリハビリ専門病院への転院もあり、復帰するにはまだ時間がかかりそうですが、元気な姿を皆さまにお見せできるよう頑張っています。

須藤紀子